



京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

ジュニアキャンパス 2012

日時 平成 24 年 9 月 23 日 (日) 14:30 ~ 16:00
場所 京都大学女性研究者支援センター
参加者 京都市およびその近郊の中学生

今年度も、京都市教育委員会との共催で、「京都大学ジュニアキャンパス」が開催されました。本事業は、中学生に学問の最先端の現場に触れてもらい、将来学びたいことについて考えるきっかけを作ることを目的としています。今年度のテーマは、「あなたをみつめよう～興味との新たな出会いと深化～」です。法律、言語、心理学、理学、工学、医学など様々な分野から、実験、工作、自然観察といった体験型の授業や討論を通した授業などが行われました。

女性研究者支援センターは、伊藤 公雄教授（文学研究科）と、センターが前期に実施したポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」の受講生 6 名が講師となり、ゼミ「大学生と語るジェンダー（「男らしさ」「女らしさ」などの社会的性別）」を実施しました。女子 7 名、男子 3 名の中学生が参加しました。中学 1 年生も 4 名が参加しました。

はじめに、女性研究者支援センターの園庭、待機乳児保育室、相談・学習ルーム、ライブラリーを見学しました。その後、緊張感をほぐすために、アイス・ブレイクを行いました。身振り手振りだけで意思疎通を行い、1 月 1 日から誕生日順に並ぶアクティビティをしました。中学生・大学生が混じり合って並んだ後、自己紹介をして、なごやかな雰囲気になった後、ワークショップを行いました。初めに、伊藤教授から、女性研究者支援センターが設置された社会的背景、国際比較からみる日本の男女共同参画の現状などについて講義が行われました。

また、ゼミ生の土橋 泰成さん（法学部一回生）が、「ジェンダー」という概念について説明をしました。

次に、2 グループにわかれ、ワークショップ「メディアのなかのジェンダー」を行いました。雑誌のなかの女性像／男性像を切り抜き、模造紙に貼りつけ、完成した作品を壁に貼り、男女の表現のされ方の違いについて

観察・発見したことを記録し、グループごとに議論しました。女性については、若くて笑っている写真が多い一方、男性は表情に動きがなく、色調も落ち着いたものが多いといった意見が出ました。そして、こういった現象の背後にある意識や文化について意見交換をしました。

最後は、自由懇談の時間を持ち、受験や進路、キャンパス・ライフなどについて中学生から質問を受けました。「今日のジュニアキャンパスに、なぜ、スタッフとして参加しようと思ったのですか」という予期しない質問や、男子学生に対して「将来家庭をもった時、自然な気持ちで、家事や育児をやりますか」といった難しい質問も出て、大学生は真剣に考えながら回答しました。

今後も、女性研究者支援センターは、次世代向けの活動を継続していきます。12 月 16 日に開催する「女子高生・車座フォーラム 2012」においても、ポケット・ゼミ生がファシリテーションを行います。



ポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」



ジェンダーや性差について、学生の知識・理解を深めるために、平成24年度前期にポケットゼミ「ジェンダーと科学（全15回）」を実施しました。このゼミは、伊藤 公雄（文学研究科）、奥田 昇（生態学研究センター）、塩田 浩平（京都大学・理事）、瀬木（西田）恵里（薬学研究科）、安枝 英俊（工学研究科）、田中 雅一（人文科学研究科）、速水 洋子（東南アジア研究所）、犬塚 典子（女性研究者支援センター）の8名の講師によるオムニバス形式で行いました。

今号では、2週にかけて行った、工学研究科 安枝 英俊先生の講義について報告します。

第8、9回「共働き夫婦の住まいの現在」

安枝 英俊（工学研究科）

安枝先生の講義は、「共働き夫婦の住まいの現在」をテーマとして、2週連続で行われました。第1週は、「共働き夫婦の住まいの現在」についての講義、第2週は、シナリオアプローチによるシェア居住計画についての演習でした。以下では、講義の内容を簡単に紹介していきます。

第1週：空間構造とシナリオアプローチ

第1週のキーワードは、「空間配列」と「シナリオアプローチ」でした。空間配列とは、部屋数に注目した従来の居住の捉え方（nLDK）とは異なり、部屋のつながり方に注目した居住の捉え方です。講義では、シェアードハウジングとコレクティブハウジングの差異、実験住

戸「自立家族の家」の知見などを検討することを通じて、空間配列という考え方について学びました。なかでも、自立家族の家の知見は、とても興味深いものでした。

自立家族の家とは、ある会社の社宅として建てられた実験住戸のことです。自立家族の家では、居住者が空間配列を変えられるような工夫（可動式間仕切りなど）が施されており、実験では、家族のメンバーが個人スペースと共用スペースを変化させていく様子の記録が試みられました。この実験により、同じ家族であっても、個人によって適合する住戸の空間配列が異なる場合があることが確認されました。

自立家族の家の知見が示唆しているのは、nLDKという基準だけでは測りきれない居住のリアリティであり、これを捉えるにあたって重要となるのが、空間配列という観点なのです。

そして、この空間配列を意識した住宅計画手法が、も

全学共通科目 新入生向け少人数セミナー

うひとつのキーワード、シナリオアプローチです。シナリオアプローチでは、居住者のライフステージごとに空間配列を変化させていくことが意識されています。

nLDKが目指したのは、夫婦同室就寝と子供別室就寝という2つの居住スタイルですが、これらは、ライフコースの一時期においてのみ必要とされるにすぎません。そして、少子高齢化が進展する今日においては、これらの居住スタイルが必要とされない期間が長期化しています。この点で、シナリオアプローチによる住宅計画は、非常に重要なものと言えます。講義では、現在／10年後（制約条件なし）／10年後（制約条件あり：車椅子生活）、という3つの条件下で、5組の共働き夫婦が作成した自己実現シナリオ（仕事の在り方などのライフスタイル）とそれに基づく単位空間配列図が紹介されました。これらの事例を検討する中で、共働き夫婦の住まいを各々のライフステージに適合させていくためには、空間配列という観点とシナリオアプローチという住宅計画手法が有効であることを深く学ぶことが出来ました。

第2週：シナリオアプローチによるシェア居住計画

第2週の講義では、第1週で学んだシナリオアプローチの演習が行われました。受講者は、グループ1（男性3名）、グループ2（女性4名）、グループ3（男性3名：TA含む）の3グループにわかれ、グループメンバーによる仮想シェア居住を計画しました。各グループは、シェア居住の空間配列図を作成するとともに、共同生活のルール（共食のパターンなど）について話し合い、最後に計画のプレゼンテーションを行いました。

グループ1は、非常にシンプルな計画をたてました。空間配列図には、共用室と個室のみがおかれ、シャワー・

バス／トイレ／洗面／キッチン／洗濯機は、すべて共用室にのみ備え付けられました。さらに、共同生活のルールは、それほど厳密にはつくられませんでしたが、共用室の機能を充実させる一方で、共同生活のルールを厳密につくらないという緩やかなシェアの在り方が面白い計画でした。

グループ1と対照的だったのが、グループ2の計画です。空間配列図には、共用室と個室のほかに接客室と趣味室がおかれ

ました。また、個室と共用室の両方に、シャワー・バス／トイレ／洗面、が備え付けられました。個室の機能を充実させる一方で、接客室や趣味室を共有する点が面白い計画と言えます。

グループ3も、グループ1とある意味で好対照をなすシェア居住計画をたてました。空間配列図には、共用室と個室のみがおかれ、共用室には、キッチン／洗濯機、個室には、バス／トイレ／洗面、が備え付けられました。空間配列図上では、かなり個室の機能を充実させている一方で、朝食を当番制にするなど、共同生活のルールが比較的多い点が興味深い計画でした。



受講者は、2週間の講義を通じて、非常に刺激的な時間——空間配列やシナリオアプローチといった考え方を学び、空間配列選好の個人差やライフステージごとの差に驚き、さらに空間配列選好を空間配列図上にまとめていくことの難しさと面白さに触れた時間——を過ごすことができたと思います。

2週間にわたり興味深い講義をしていただいた安校先生、ありがとうございました。

ティーチング・アシスタント 高山 勉
(文学研究科 社会学専修 修士課程)



連載：研究者になる！－第40回－

心の中のライバル

環境科学センター・助教

浅利美鈴



「研究者」という職業は、大学院に進むまで考えたことのない選択肢であった。そもそも「大学」の印象は「暗くて窮屈」なところ・・・早く社会に出てバリバリ働きたい！という気持ちで3回生までを過ごしていた。そのイメージが変わったのは、3回生になり、専門科目の講義が本格的になり、また4回生になって、研究室に配属されるようになった頃かだろうか。自分の興味のある分野で、国際的に活躍される先生方から刺激を受けるようになった。私が専門とする環境工学は、学問分野としてはまだ若い。その頃は、その分野のパイオニアというべき先生方も多く、研究の原点やポリシー、苦労話などに感銘を受けることも少なくなかった。また、同時に、4回生になったときに、「京大ゴミ部」という環境サークルをクラスメイトで立ち上げた私は、ようやくキャンパスライフらしきものを送るようになった。

さて、4回生になって配属先に選んだのは、ごみの研究室（当時、高月紘教授、酒井伸一助教授）であったが、これも運命的な出会いと言える。それは、得難い恩師と、「ごみ」というユニークな研究テーマとの出会いである。そもそも、環境問題の解決を志して選んだ学科（工学部地球工学科）であったが、まだ環境問題への社会的関心がそれほど高くなかったため、まずは意識啓発からと、マスメディアへの道を考えていた。そんな私にとって、研究で目の当たりにする環境・ごみ問題は、TVですぐに正確に伝えられるほどシンプルなものばかりでなく、問題の奥深さを知った。まだまだ学ぶべきことは多いと、大学院への進学を決めた。

大学院では、4回生のときに立ち上げた京大ゴミ部の取組にも力を入れた。特に啓発活動と子供への環境教育などを、仲間たちと企画・運営した。学内外の様々な人との関わりも増え、やりがいも感じていたが、同時に「これだけ頑張っているのに、世の中なかなか変わらない・・・」と無力感

を感じることもあった。そのような中、進路の選択に迫られる。以前から考えていたマスコミ就職・・・ただ、このまま就職して、私は世の中を動かせるような報道ができるだろうか？それよりも、もう少し研究を続けて、自信を持って情報発信できるようになった方がよいのではないかと？そんなことをかなり真剣に考えて、内定を頂いていた放送局を断り、恩師に頼み、博士課程進学道を選んだ。それ以降、「マスコミに入り、頑張っていたであろう私」が私の頭の中のライバルになる。

博士課程は、今から思うと、研究に全力投球できる非常に貴重な時間であった。京大ゴミ部の延長線上で、いくつか活動も続けながら、研究に没頭した。博士課程進学の際にある先輩から教わった言葉がある。「博士号は、足の裏の米粒だ。取れないと気になるけど、取っても食えない。」その通りで、博士号取得後の進路も悩んだ。国際機関で働くことも考えたが、結局、恩師に拾われる形で、そのまま大学に残ることとなり、今に至っている。

今はどうか？博士課程を経ると、どうしても社会人になるのが遅くなるため、まだまだ駆け出しの気分が抜けない。今も常に、自分の職業については悩んでいる。本当に自分は「研究者」と言えるのだろうか？また適性はあるのだろうか？と。研究については、恩師たちや同僚、仲間の研究成果に刺激を受けつつ、自分にしかできないことを模索している最中といったところか。まだまだ修行中だ。また、大学の研究者は、研究だけでなく、教育や社会活動（行政の会議等への参加）、それらに付随する手続きや業務と、やらなければならないことが山積し、自己管理能力が求められる。しかし、周りを見ても、オーバーフローしている人が少なくなく、それでもめげないこと、こごぞというときは迷惑をかけないようにやりきることが大切だろう。

さて、改めて研究者という職業について考えると、少なくとも現在の環境については、他に今の私の状況を許容できる場は考えられない。環境問題に関する活動を続け、度々国内外のフィールドに駆け付け、また、自らの意見や想いを述べ、理想に向かってチャレンジを続けられる。これほど恵まれた環境は他にはないと思っている。心の中のライバル、他の職業について頑張っていたであろう自分に負けずに、努力を続けたい。



Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>